

長く伸びた牧師

I saw a parson twelve feet high

世界は たくさんの要素 でできていて
それらを積み上げることで 至極当然の結果を導いたり 納得し難い奇妙な未来を構築したりする

そもそも 納得し難い とか 奇妙な とかいう判断は
僕たちが 至極当然 側の世界にいるから そう感じるのであって
その価値基準さえも たくさんの要素 が作っているのだ

とにかく 世界は たくさんの要素 の積み方に依るのであり
世界はひとつではない
積み上げ方の数だけ 世界は存在する

.....

ここに かつて タオル産業で栄えた町がある

当時は そここの工場から 機械の音があふれ出し 昼休みのサイレンが鳴り響き
町全体が工場のようなようであった

たくさんの要素 の影響を受けて ひとつ ふたつと 工場は姿を消していった
残った工場は息をひそめて そこにじっと耐えている

ほんの少し先の未来で 彼らがいなくなってしまうのは 至極当然 のことのように思われる

工場はうち捨てられ 産業のなくなったその町から ひとびとはいなくなる
大事に梱包されたタオル 機械も 使わなかった糸も 埃がつもる

そこで録り続けられているのは
タオル産業の枠を飛び越えて 人々がものづくりに励む毎日
まちの人々は時間があるとどこへ行くも 職人たちもあふれる程にいる
素人から発想を得 友人から技を得る 互いに教えあい 励ましあい しながら ものをつくる
それは 本来 ひとが生きる姿である
噛みただけけれど それだってほんとうの世界

.....

きみと僕は 水面の中や ちょっとしたうたた寝の夢の中で もうひとつの世界を垣間見る
もしくは ずっと使っている机のひどつば そこへつながっているかもしれない

I saw a fishpond all on fire
I saw a house bow to the squire
I saw a parson twelve feet high
I saw a cottage near the sky
I saw a balloon made of lead
I saw a coffin drop down dead
I saw two sparrows run a race
I saw two horses making lace
I saw a girl just like a cat
I saw a kitten wear a hat
I saw a man who saw these too
And said though strange they all were true

池をみかけた 火事でもえてた
家をみかけた だんなにお辞儀していた
牧師をみかけた 長く伸びてた
小屋をみかけた 空をとんでた
風船をみかけた 鉛でできてた
棺をみかけた 落ちてしんでた
二羽の雀をみかけた 駆けっこしていた
二頭の馬をみかけた レースを騙んでた
少女をみかけた 猫そっくりの
子猫をみかけた 帽子かぶってた
おとこをみかけた 私とおなじものをみかけた
おとこは言った ほんとうのことなんだ 噛みただけけど

ーマザー・パースの一面よりー



who saw these too and said though strange they all were true
I saw a fishpond all on fire
I saw a house bow to the squire
I saw a parson twelve feet high
I saw a cottage near the sky
I saw a balloon made of lead
I saw a coffin drop down dead
I saw two sparrows run a race
I saw two horses making lace
I saw a girl just like a cat
I saw a kitten wear a hat
I saw a man who saw these too
And said though strange they all were true

池をみかけた 火事でもえてた
家をみかけた だんなにお辞儀していた
牧師をみかけた 長く伸びてた
小屋をみかけた 空をとんでた
風船をみかけた 鉛でできてた
棺をみかけた 落ちてしんでた
二羽の雀をみかけた 駆けっこしていた
二頭の馬をみかけた レースを騙んでた
少女をみかけた 猫そっくりの
子猫をみかけた 帽子かぶってた
おとこをみかけた 私とおなじものをみかけた
おとこは言った ほんとうのことなんだ 噛みただけけど

■ホールの棟

この棟では、各地の職人さんや技術者、デザイナー、指導者を出して講演会や勉強会が行われている。近くのワークショップで、聴講した人たちは聞いた話を復習しながら実践してみたり、話をしに来てくれた職人さんと一緒に作業したりする。

1Fでは、これまでに行われた講演会の映像資料や文献、現在行われている話題の講演会やワークショップについての資料が揃えられている。

ベルトコンベア「長く伸びた牧師 parson twelve feet high」

タオル工場が3つ立ち並ぶこの場所に、それらをつなぐ物流ラインを設置した。縮から糸、糸からタオル、真っ白なタオルに柄をつけて・・・と、製品が出来上がる工程を目の当たりにするだけでなく、人々は宙に浮く工房へ行くためにコンベアの橋の下やエスカレータを利用する。またワークショップからワークショップへ物を運ぶのにもベルトコンベアを利用するし、工場の物流ラインという役目のほかにも、ひとひとののづくりに関わっている。

厨房「空とぶ小屋 cottage near the sky」

「ものをつくる」という意味ではここも工房だ。ベルトコンベアが作る壁越しに、おいしそうに食べる人々を見るのがシェフのお気に入り。

■ホールの棟「教わる」

町の人々が、職人さんの技術に触れられる。

■エントランスの棟「見る」

ベルトコンベアが見えたり、展示ギャラリーを巡ったり、ものづくりに興味をもつ機会になる。

■図書棟「知る」

ものづくりのインスピレーションを得に人々が訪れる。

■倉庫の棟「ふれる」
物がたまったり、出て行ったり物流の場所。人々は物と対話する。

会議室 管理部 店舗 受付 リサイクルセンター ゴミ収集所 倉庫 ワークショップ 図書 美術館 情報端末 工場ライン レストラン 工房 ホール

concept

昔話をする人たちは遠くを見ている。彼らの語るものは共通していて、それだけが一人歩きして見たこともないような世界が私たちの知らないどこかで広がっているのかもしれない、と思ってしまう。「昔話」をするひとは過去を見ているんじゃないくて、現在も進んでいるその世界を垣間見ているんじゃないか。むしろ今、この私たちのいる世界が、どこか違う世界で語られる「昔話」の中なのかもしれないとさえ思うことがある。

この作品では、大阪府泉佐野市で当然のように縮小していくタオル工場の、「昔話」と現在の姿のあまりに違うことから、泉州が「昔話」の時点からこの工場のような工房のような、まちになることもあり得ると考えた。かつて泉州からタオル工場が消えていってしまうと想像できなかったように、この嘘みtainな世界もほんとうである可能性を持っている。

美術館「レースを編む二頭の馬 two horses making lace」

5室を回遊する美術館。天井がはられている室は他の室とはちょっと違って、卵の中みたいだ。エスカレータや階段の両サイドは絵画など美術品で埋め尽くされていて、膨大な情報量に触れる。かと思えば、最後の室には絵画が一枚だけ置かれていて、その空間の空白がふっと心を浄化してくれるように。ものづくりを始めようとするときや、行き詰ったときに、ここを訪れると、ひとつのストーリーを読んだような気分になって、意欲が湧いてくる。

図書館「駆けっこする二羽の雀 two sparrows run a race」

本を読む。ここでは静かに読まなきゃいけないというルールはない。新しく発見した表現方法や、ものづくりに関することだけでなくある文脈についての新発見など、みんなが報告しあっている。壁の模様を通して落ちてくる光は、まるで木漏れ日みたいで森の中にいるような気がする。遠くにいた友達から、ベルトコンベアにのって本が届く、そんな仕掛けがいくつかある楽しい図書館。

■図書の棟

この棟には、ものづくりに関する本がそろっている。インスピレーションを得られそうなアートの本や、材料の取り扱いについての本など、幅広く取り扱っている。映像資料を見るためのメディアルームもあって、人々は今打込んでいるものに思いを馳せながら、さまざまな資料に触れる。

中には美術館もあって、5室を回遊する形式になっている。たとえば室と室をつなぐエスカレータの両サイドには、壁のパターンのなかに絵画が埋めこまれていて、そこを通り抜けるとき大量の情報が通り過ぎていって、刺激を受けるだろう。

■倉庫の棟

各棟のいたるところでもものづくりが行われているので、大量のゴミや材料の端材がでる。それをまとめておいたり、ワークショップの一環として洗濯や乾燥を行う。

1Fは棚がたくさん置いてあって訪れた人たちは持ち寄った端材を並べたり、あるいはそれらを縫うように歩き回って、自分のほしい部材を物色する。また大工道具やミシンなど機材、クラフトなど小物を扱う材料屋さんもあり、この棟を巡るだけでもものづくりの想像がかき立てられるだろう。

材料屋「帽子をかぶった子猫 kitten wear a hat」

ここは材料の扱い方に詳しいおじいさんがやっている。倉庫の棟には膨大な量の材料が置かれていて、その場所やものを正確に把握しているのは彼だけだ。みんながここにやってきて、おじいさんに相談する。

ワークショップ「猫そっくりの少女 girl just like a cat」

集積された材料がゴミ置き場からこのワークショップへベルトコンベアで運ばれてくる。人々はワークショップの一環としてここで洗濯したり、干したりしてレストランでた空のペンや、さまざまな工房から集まってきた端材を、またものづくりのラインへ還元する。

5m 15m 30m 50m

GL+1600 plan



